



2021年8月12日夜～13日明け方

ペルセウス座流星群を観察しよう！

岡山天文博物館

毎年多くの流星があらわれるペルセウス座流星群が、今年は8月13日午前4時頃に極大（流星群の活動が最も活発になる）をむかえると予想されています。とても良い条件なので、12日の夜～13日明け方（特に13日の夜明け前）にかけて、観察してみましょう。きっとたくさんの流星が見られるはず。夏の夜空を楽しみましょう！

■ペルセウス座流星群とは

「ペルセウス座流星群」は、毎年8月12日～13日にかけて活動のピークをむかえ、安定して（いつもより）たくさんの流星を見ることができる、夏のおなじみの天文現象の一つです。秋を代表する星座の「ペルセウス座」の方向から放射状に流星があらわれることから、「ペルセウス座流星群」と呼ばれています。

1月の「しぶんぎ座流星群」、12月の「ふたご座流星群」とならんで「三大流星群」の一つに数えられています。

■流星と流星群

宇宙をただよう小さなチリが、地球のまわりの空気（大気）に高速でとびこみ、大気との衝突によって光り輝く現象が流星（流れ星）です。特に、すい星がとおった軌道のまわりには、すい星から放出されたチリがたくさんあります。地球がこのチリの帯を横切るときには、たくさんの流れ星を見ることができ、これを流星群と呼んでいます。

■母天体と放射点

流星群の流れ星をよく調べてみると、星空のある一点から放射状にとび出すように見えます。流星がとび出す中心となる点を「放射点」と呼び、一般には、放射点のある星座の名前をとって「〇〇座流星群」と呼んでいます。ペルセウス座流星群の放射点は、ペルセウス座γ星の近くにあります。

また、流星群のもととなるチリを放出したすい星を、その流星群の母天体といいます。ペルセウス座流星群の母天体は、約130年かけて太陽のまわりを回っているスウィフト・タットルすい星です。



図. 8月13日午前3時頃の空の様子（浅口市）

今年のペルセウス座流星群の活動がもっとも活発になるのは、8月13日午前4時頃と予想されています。気になる月明かりも、8日が新月にあたり、夜おそい時間には月もしずんでいることから、ほとんど月明かりの心配もなく、極大の時刻とあわせて、とても良い条件で観察できそうです。

●いつ、観察すればいい？

活動のピークにあたる12日深夜から13日の明け方にかけて（特に13日の午前3～4時頃）にたくさん流星が期待できます。

天気や都合にあわせて、その前後（11～12日、13～14日）の日も含めて、放射点のあるペルセウス座がのぼってくる午後9時以降に観察してみましょう。（放射点が高いほど流星があらわれやすくなります。）

●どこで？

街明かりのない美しい星空の広がった場所が理想的です。そんな場所に行けなくても、

- ・できるだけ空の広い範囲を眺めることができる場所
- ・街灯や明かりが少ない（空を見上げたときに明かりがじゃまにならない）ところ

など、観察に良さそうな場所を家の近くで探してみましょう。

※くれぐれも危険な場所や立ち入り禁止の場所で観察はしないように！

●どうやって？

流星はいつ・どこにあらわれるかは誰もわかりません。望遠鏡や双眼鏡などの道具はつかわずに、外に出て自分の目（肉眼）で、放射点の方向ばかりにとらわれずに、星空を広く眺めるように観察しましょう。（暗いところに目が慣れるまで時間がかかります。外に出てすぐに流星が見えなくてあきらめるのではなく、少なくとも15分くらいは観察してみましょう。）

■ ペルセウス座流星群の観察

◎目（肉眼）で観察する

流星が、一定の時間ごとに（例えば、10分間や20分間など）、どれくらい見えたか記録していくと、それだけでも立派な自由研究になります。

長い時間、立ったまま空を見上げて観察していると疲れます。レジャーシートなどをつかって、寝転んで観察すると、空全体を見やすく流星も見つけやすくなるのでオススメです。

◎写真に撮る（大人向け）

もし、デジタル一眼レフカメラなどをお持ちの場合は、流星の撮影にもチャレンジしてみてください。最近のデジタルカメラやスマートフォンのカメラ機能は、性能や感度も良くなっているので、もしかしたら撮影できるかもしれません。

撮影のコツとしては、広角のレンズをつかい、三脚にカメラを固定して撮影します。ISO感度を高く、しぼりを開放に設定し、シャッタースピードを数秒に調整しながら、（カメラの設定が決まったら連続で）撮影してみましょう。流星はいつ・どこにあらわれるかわかりません。運よく、撮影中、カメラをむけた方向に、明るい流星があらわれると、写っている可能性があります。

図. 流星の撮影例

さそり座と流星（2016年5月11日撮影）

